

治痘新書・近古医史

隨筆：或人物語・雄花艸子・仮初草

歴史：温故園・文物古今通志・川内撫古小識・金石古文

模勒帖（模刻鐘銘帖）

地理：地志糾纏

紀行：勢遊草・遊和紀行・遊南河内記・詣千光寺記・登

鷲峰山・石川紀行・斑鳩日記

△付記 友人の著作を出版。御園常言『阿豆満安曾比歌解』

中井微頭『古囊考』▽

〔交流〕

師……小野蘭山・鈴木蘭園・佐渡法眼

在所……井上桐亭・同金橋・岡田鶴鳴、小磯逸子（岡田逸）、

井上雀子

大坂……藤井高尚・八木巽所・松本愚山・慈雲尊者・藤沢

東畎・本居内遠・西田直養

京都……御園常言・中井微頭・梅川重高、以文会員

奈良……穗井田忠友

〔参考書目〕『枚方市史』本編、『大日本金石史』木崎愛吉

書等。

（兵庫教育大学）

医師木戸麟の近代社会への貢献

丸山 知良

明治十一年九月三十日に版權免許を受けて群馬県では小学校教科書『修身説約』を刊行した。群馬県令楫取素彦はその第一巻に序文を掲げ「文明開花が説えられている。欧米がよいとか中国の伝統を尊ぶとかいう。群馬県は物産に富み、その輸出が極めて多く、外国商人との交流もしばしばあるので欧米の文明開花の考え方や風俗が入り易い。このことはすぐれた反面、弊害も免れ難いところがある。欧米が進んでいるのは勤勉なことにある。その進んだ位置に一遍には到着しないが、次第に進歩させなければならぬ。ただ群馬県人は勤勉で苦しみを乗り越えて産業を發展させているから、欧米をうらやむ必要はない。管下の学校に於いて本書によって学べば弊害を抑え自から勉学の道を開くことができよう。」という。

本書は群馬県内ばかりでなく新潟県、福島県などの隣県

から、岐阜県、福岡県に至るまで使用された。

欧米の新しい話題を取入れ、日本と中国の長所をもって内容を構成し、成長段階への配慮も当時におけるすぐれた道徳教科書であり、読みものとなった。文章は暗記されて児童の精神形成に大きな影響を与えた。

著者は木戸麟である。いかなる人物であるか。

出身は土佐国中村の木戸家。中村の豪商吸田屋の有力なる商家であった。いとこの木戸明の漢学塾(遊焉堂)に学び、助教を勤めた。後に中村の医師甲把瑞益に学び、更に大坂の華岡準平に学んで医師となり、中村の西の下の加江村で開業した。明治三年十月に高知藩の第二大隊附を命ぜられ、兵隊附医師となった。明治五年六月には陸軍省軍医寮に出仕した。軍の整備に伴って陸軍本病院、東京鎮台歩兵第一大隊附などから明治七年六月に熊本鎮台勤務となり、同年七月に陸軍軍医補(少尉相当官)になった。

熊本県令は安岡良亮であった。良亮の父政五郎の姉の子が木戸明。家も同じ中村城下のすぐ近くであった。

安岡良亮は明治四年に高崎県参事となり、保守革新の対立の県内を治め、度会県(三重県)に移った。この両県を

安岡に従った者に尾崎行正がいる。その子の行雄(粵堂)は後に三重県を選挙区とした。次いで明治六年五月に白川県権令(後に熊本県令となった)として赴任。県内は実学派と学校派と敬神派の三つどもえで攻争がはげしく、困難な熊本統治に懸命なる力量を発揮した。しかし明治九年十月に神風連の変が起り、県令安岡と鎮台司令官種田政明は死亡した。木戸麟はその間にあって奔走したが安岡の死亡にあい、失意のうちに退職した。

明治十年四月十一日、群馬県庁に勤務した。安岡良亮のもとにあって活躍した宮部襄の配慮によると考えられる。同年十月十五日に『修身説約』の執筆にかかり、翌年出版になった。

明治十二年一月十日に衛生科兼群馬県医学学校御用掛となり、近代医学の発展のための基礎造りにつとめた。その間、医学学校規則の編さんに従事した。

木戸麟の群馬県への奉職は明治十年四月十一日から十二年八月十六日までの二年四カ月であるが、道徳の面からの近代化と医学の面の近代化への努力をあげることができ

なお、明治十二年十二月に福岡県に勤務し衛生科兼学校掛となり、十九年九月に衛生課長となった。二十四年二月には福岡県典獄に移った。

明治三十四年一月十七日、東京市で五十四歳（數之年）で没した医師としての一生の中に、近代化への努力と、その影響について改めて評価すべきものがあると考ええる。

（群馬県議会図書室）

『太素』と『素問』『靈枢』の 比較的考察

丸 山 敏 秋

現存する中国最古のまじった医書として知られる『素問』『靈枢』（通称『黄帝内経』）は、中国伝統医学の原典として永く尊ばれてきた。複雑な伝来の過程を経た両書の現行本には誤脱や錯簡・補入が少なからず存し、今後の研究において厳密なテキストクリティックが必要とされている。その際、両書の別伝のテキストと言うべき『太素』や『甲乙経』との比較校勘は不可欠な作業と言わねばならない。

とりわけ中国本土では早くに散佚して我が国にのみ伝わる楊上善注『太素』（平安末、丹波頼基の手写本、仁和寺所蔵）は、宋改を経っていない『黄帝内経』のテキストとして極めて資料的価値が高い。蕭延平本など、従来の『太素』の刊本は仁和寺本の写本あるいは再写本に基づくものである